

# 子どもの道徳性の発達（4）

## —大人の強制と道徳実在論（ピアジェ）（下）—

関口 昌秀

### はじめに

（上）ではピアジェ『子どもの道徳判断』の「第2章 大人の強制と道徳実在論」の「第2節 客観的責任性（1）—失敗と盗み」まで、ほぼピアジェの議論の順序の通り紹介した。本稿では、（上）で紹介したものを含めて、まず第2章における実験とその結果を整理して示しておく。そして実験結果に対するピアジェの解釈を示す。

解釈には当然ピアジェの仮説、自己中心性が含まれるが、本稿ではこれらを実験結果の解釈と区別しておく。実験結果の解釈としては、一般に妥当と思えるものだけにかぎって述べる。自己中心性は『子どもの道徳判断』以前の研究のなかで取りだしたものである。したがって、本稿が扱う同書第2章のなかではピアジェにとっては証明された前提として登場する。先行研究では、「知的実在論」も取りだされた。ピアジェはこの「知的実在論」との平行関係から「道徳実在論」を仮定した。したがって、「道徳実在論」はここでの実験結果から証明されなければならないものとなる。

### 1. 7種類の実験

ピアジェが第2章で行った実験をまとめると、次の7種類にまとめられる。

- ① 2種類の失敗を比較した質問
- ② 2種類の盗みを比較した質問

- ③ ウソの定義についての質問
- ④ ウソの意図性を比較した質問
- ⑤ ウソでの意図と結果を比較した質問
- ⑥ ウソをついていけない理由についての質問
- ⑦ 子どもたちにウソをつくのは悪いことかと問う質問

ピアジェの実験は、すべて、子どもに質問していったって回答を得る質問法である。これは一問一答というのではなく、医者問診のようなかたちで行われる。ピアジェ自身は、「精神療法師が診断手段として採用している方法に類似した臨床的方法」（『子どもの言語と思考』序文<sup>1</sup>）だと述べている。そのようなスタイルなので、ここで7種類に分けたが、7つの質問をしたというわけではない。①、②、④、⑤は2つの話を子どもにして、子どもの判断を問う質問であるが、その他の3つはそうではない。この本を読むかぎりでは実態がよくわからないが、おそらく、①、②、④、⑤などの質問をするなかで、③や⑥、⑦などの質問をしていったのではないかと推測される。またすべての子どもに、①から⑦の質問をしたのかどうかも、わからない。

ピアジェの議論の展開から実験結果を分類すると、以上の①から⑦となる。

#### 1-1. 2種類の失敗を比較した質問

失敗についての質問（実験①）は、ものごとの善悪を子どもが判断するときに、引き起こされた結果を重視して良し悪しを判断するか、そ

れとも行為者の動機を重視して良し悪しを判断するかを調べようとしたものである。そのために、ピアジェは対になる2つの話をして、どちらがより悪いか質問する。

失敗というのは、思わずしてしまったことである。失敗とは、そうしようという意図がないときに生じてしまった出来事である。比較するのは2点ある。1つは生じてしまった結果の大きさである。もう1つは、失敗を起こすに至った行為の動機である。結果の大きさというのはわかりやすい。コップを1個割ったのとコップを10個割ったとの違いである。動機の違いというのは、同じコップを割るにしても、親を喜ばそうとしてコップを洗っていて割ってしまった場合もあれば、食器棚にあるジャムを取ろうとして食器棚の中のコップを割ってしまった場合もある。前者は、他者のために善意で行った行為の結果としての失敗である。それに対し後者は、自己利益のために行った行為の結果としての失敗である。

このような2つの要因、引き起こしてしまった損害結果の大小と、失敗を引き起こすに至った行為の動機の違いという要因を、組み合わせた話を子どもに話して、どちらがより悪いかと子どもに質問するわけである。しかも、この組み合わせは、善意から行った行為が大きな結果を引き起こしたという話 (a) と、自分のために行った行為だがもう一方と比較すると小さな損害結果に終わったという話 (b) とを対にして、どちらがより悪いか質問する。

ピアジェが具体的に使用した話は3組ある。1つは、食事が出来たと呼ばれ、勢い込んで食堂へ入ろうとしたとき、食堂のドアの向こう側にたまたまイスが置いてあって、ドアを開けたらイスにぶつかってしまった。しかも運の悪いことにはそのイスの上にお盆にのせてカップが15個置いてあった。それでカップが割れてしまったという話 (1a)。この子の行為は善意とまでは言えないが、ドアの向こうにイスがあってカップが置いてあることは知らなかった。全

くの不可抗力の失敗である。これと比較したのは次のような話である。その子は、お母さんが留守のとき、イスにのぼって食器棚の中のジャムを取ろうとしたが、ジャムが高いところにあってなかなか取れず、そうしているうちにカップに手がふれてカップを床に落として割ってしまった。だが、この子が割ったカップは1個であったという話 (1b)。

2つ目の対の話は次のようなものである。1つは、お父さんのインクスタンドが空だったので、お父さんが留守のときインクを詰めてやろうとして、インクびんを開けたら机のテーブルクロスに大きな染みを付けてしまったという話 (2a)。もう1つは、お父さんが留守のときお父さんのインクスタンドで遊んでいて、机のテーブルクロスに小さな染みを付けてしまったという話 (2b)。

3つ目の対は、お母さんの留守中にスカートの布地を裁断してお母さんを驚かそうとした女の子が、ハサミを上手く使えなかったため、自分の服に大きな穴をあけてしまったという話 (3a)。これと比較したのは、お母さんの留守中、お母さんのハサミで遊んでいて、自分の服に小さな穴をあけてしまったという話 (3b)。

2aと3aは、子どもが両親を喜ばそうという善意から行った失敗だが、その結果は大きかった。2bと3bは自己利益を求めて起った失敗である。ただし、引き起した結果は2a, 3aと比べて小さな損害だった。

## 1-2. 2種類の盗みを比較した質問

盗みは、失敗とちがって、意図的な行為である。そこには、盗もうという意図がある。そういう意味で、盗み自体は非難されるべき悪いことである。しかし、盗むに至った事情というものがある。盗みの中には、他者のために行う盗みというものがある。

ピアジェはここで、他者のために行った盗みと、ふつうの盗みすなわち自己利益の盗みとを比較させる。そして、ここでも盗みの結果は大

きさが異なる。他者利益のための盗みの方が、自己利益のための盗みより損害結果が大きい。この２つを比較させて、盗んだ結果と盗むに至った事情のどちらを子どもは重視するかを調べた。（実験②）

具体的に質問した対の話は次のようなものである。貧しい友だちが何も食べていないのを知った少年が、お金をもっていなかったので、パン屋でその友だちのためにパンを盗んでしまったという話（4a）。これに比較した話は、自分の服に似合うかわいいリボンを見つけた少女が、リボンを盗んでしまったという話（4b）である。これがひとつの対である。

この他にもう１つの対の話がある。友だちが飼っていた小鳥が可哀そうだと思って、小鳥を逃がしてやり、友だちの鳥かごを盗んで屋根裏部屋に隠してしまったという話（5a）。これに比べた話は、お母さんの留守中、お母さんのお菓子をこっそり盗んで食べたという話（5b）である。

4aと5aは、その日食べていない貧しい少年のため、あるいはかわいそうな小鳥のために行った他者利益の盗みである。4bと5bは自己利益のための盗みである。盗みの結果は4a, 5aの方が大きい。パンとリボンを比べて、パンの損害結果の方が大きいというのは、現在ではわかりにくいだが、ピアジェが調査した当時のスイスの状況では、そうだった。

これらの対のどちらがより悪いものであるかと質問し、そしてそう判断する理由を子どもたちにたずね、結果重視か動機重視かを確認していく。

### 1-3. ウソの定義についての質問

3番目の実験（実験③）は、ウソの定義についての質問である。ウソとは何かという質問である。

なぜこのような質問をピアジェがしたのかというと、じつは年少の子ども（この実験は小学生を対象としたものだから、小学校の低学年が

年少の子どもである。）は、わたしたち大人が理解しているような意味でウソという言葉を理解していないからである。

たとえば、年少の子どもの場合、ふつうの意味でのウソ以外に、人前で使ってはならない悪い言葉、タブーのような言葉も、ウソと理解している。子どもが、ウソという言葉の理解をどのように発達させるか。子どもは何才くらいになったら、大人が理解するような意味でのウソを、つまりウソの本当の意味を理解できるようになるか。それらを明らかにする意図がある。

### 1-4. ウソの意図性の比較

実験④は、ウソについての対の話と比較して、どちらがより悪いか質問し、その理由も質問する。一方の話は、悪意のないウソである。いいかえると、事実を誇張して正確に言わなかった話、あるいは冗談ともとれるような話である。それと対になるもう一方の話は、真実らしく見えるが、相手を騙そうとする意図をもって話したウソである。後者は相手を騙そうとする意図がはっきりしたものであるのに対し、前者の方は騙そうとする意図がないか、騙そうとする意図の弱い作り話のようなウソである。この２つのどちらがより悪いか質問して、子どもが意図性を重視するかしないか調べる。

具体的質問は次のようなものである。ある少年が街で出合った大きな犬を見て怖くなり家へ帰って、お母さんに牛ほど大きな犬を見たと言ったという話（6a）。これと比較する話は、別の少年が学校から帰ってきて、お母さんに先生から良い点ももらったと言う。しかし、これは本当でなく、先生は良い点も悪い点もくれなかった。ところが、これを聞いたお母さんはたいへん喜んでご褒美をくれた、という話（6b）。

6aの方は悪意のないウソである。6bはお母さんを騙そうという意図のあるウソである。これら２つを比較して、どちらがより悪いウソであるかと子どもにたずねる。

２つ目の対は、自動車に乗りたかった男の子

が街でカッコいい自動車を見て家に帰り、お母さんに、自動車の人が車を止めて街を一回りしてくれたと話した。しかし、これは本当のことではなく、自動車に乗せてもらったというのは、この少年の作り話だった(7a)。これと比べたのは、部屋で遊んでいた男の子がお母さんにお使いに行くと頼まれたとき、足が痛いから行けないと言った。しかし、これは本当ではなく、お使いに行くのが嫌だから足が痛いと言ったという話(7b)である。

3つ目は、絵が下手で上手になりたいと思っていた男の子が、他の子が描いたきれいな絵を見て、「これはボクが描いた絵なんだ」とお母さんに言った話(8a)。これと比べたのは、お母さんの留守中に男の子がハサミで遊んでいて、ハサミをなくしてしまった。しかし、お母さんが帰ってきて、ハサミを知らないかとたずねられたとき、ハサミを見もしなかったし触りもしなかった、と言った話(8b)である。

これら2つの話も、(a)の方が悪意のないウソ、作り話であり、(b)の方が母親を騙そうという意図を含んだウソである。

### 1-5. ウソでの意図と結果の比較

実験⑤も、2つのウソに関する話を比較した質問である。ただし、実験④とは異なる。実験④の意図性を比較したウソについての話は、失敗や盗みについての話とはちがって、大きな損害結果を引き起すというものではない。そこでピアジェはウソについての4つ目の対として、単なる誤りを言っただけなのだが重大な結果を引き起してしまった話と、意図的にまちがいを言って相手を騙したが重大な結果を引き起さなかった話とを比較させる。この実験で、意図と結果のどちらを重視するかを比較した。

また、ウソとは本来相手を騙そうとすることだから、この実験は、ウソの本質が理解できるかどうかということにも関係している。

具体的な質問は次のようなものである。片方の話は、自分の住んでいる街の通りの名前をよ

く知らない男の子が、ある日街で紳士に道を聞かれて、ちがった道を教えてしまった。その結果、その紳士は道に迷ってしまい探していた家に辿り着けなかった、という話(9a)。これと比較する話は、街の通りの名前をよく知っている男の子が、ある日街で紳士に道を聞かれたとき、騙そうと考えてちがった道を教えた。でも、その紳士は正しい道を見つけ出すことができ、探していた家に辿り着くことができた、という話(9b)。

この2つの話で、ピアジェは、子どもが結果の重大性と騙すという意図のどちらを重視してウソを判断するか調べようとした。

### 1-6. ウソが悪い理由についての質問

6番目の実験(実験⑥)は、ウソをついていけない理由を、子どもがどのように考えているか調べる質問である。これを調べる理由は、年齢とともに、ウソをついてはいけない理由が変化するからである。たとえば、「叱られるから」ウソをついていけないというのが、子どものいちばん最初の理由である。その後変化していく。そこに道德性の発達を見ようとするわけである。

「他律から自律へ」という道德性の発達法則の端緒、子どもの道德性が「他律」ではじまるということも確かめられる。「叱られる」というのは他律だからである。

### 1-7. 子どもにウソをつくのは悪いかの質問

7番目の質問(実験⑦)は、子どもにウソをつくのは悪いことか、という質問である。このような質問をしたのは、じつは、年少の子には、子ども同士でウソを言うのは、悪いことではない、という認識があるからである。この質問によって、それが確認されたということであるが、それがいつごろ変化するか、それを調べたわけである。

ここで何がわかるかということ、「他律から自律へ」という発達の契機が、子ども同士の協同

（「相互尊敬」）にあるというピアジェの仮説を確かめるのである。

### 1-8. 方法的限定

以上の①から⑦のすべての実験で、ピアジェが対象としたのは小学生である。そして①から⑦すべてで、小学校低学年と高学年とでは反応が異なることから、ピアジェは、道徳性の発達の法則をみようとしたわけだが、この章（第2章 大人の強制と道徳実在論）で行った実験には1つの方法的限定がある。

ここで調べたのは、子どもが実際にどのような道徳判断をするかということではなく、言葉で聞かれたレベルでどのように答えるかということである。実際にどのように道徳判断するかということと、言葉でどう答えるかは、まったく別のことだとピアジェは強調している。この章は、そういう区別で見ると、後者、言葉でどのように答えるかだけを問題にした。

ちなみに、第1章（遊びの規則）は、ビー玉遊びの規則についての考え方だけでなく、ビー玉遊びの実際の規則も調べている。この第2章では、実際の道徳判断を調べていないというのが、方法上の制約点である。

## 2. 実験の結果

### 2-1. 失敗および盗みについての質問結果

表1は、失敗についての質問（実験①）と盗みについての質問（実験②）の結果をまとめた

ものである。

表中の「結果重視」というのは、失敗でも盗みでも与えた損害結果の大きい方（1a～5a）が悪い行為であると回答した子どもである。「動機重視」というのは、失敗でも盗みでも与えた損害結果は小さいが、行動の動機が遊ぶためとか自分のためとか自己目的のために出た行為の方（1b～5b）が悪い行為であると回答した子どもである。

表の中のかっこ（ ）内の数字は、「第2章 大人の強制と道徳実在論」の叙述の中でピアジェが例示した子どもの年齢である。叙述中では月齢まで示された子どももあるが、ここでは月齢を切り捨て年齢だけ取ってある。かっこ前の小数点のある数字は、その平均である。ピアジェが例示した子どもは、おそらく調査したすべてではない。だから、例示した平均年齢は統計的な意味での平均ではない。だが、1つの指標としての意味はあると思われる。

この表に入れてない子どもが1人いる。カップを割った話の例として出ている6才半の女の子シュマである。この子は、結果重視から動機重視への移行期を示すものとして、ここでは含めていない。（上）では主観的責任性の事例、つまり動機重視の事例として紹介した。その点（上）と位置づけが異なることを述べておく。この事例については、のちに「3 実験結果の解釈」のなかで触れる予定である。

表を見てわかるように、与えた損害結果が大きい方が悪いと回答した「結果重視」は、年齢

表1 失敗および盗みについての質問結果

	結果重視	動機重視
カップを割った話	6.3 (6, 6, 7)	8.8 (7, 9, 9, 10)
インクの染みの話	6.5 (6, 7)	8.3 (6, 9, 10)
穴をあけてしまった話	6.5 (6, 7)	7.5 (6, 9)
パンとリボン	6.0 (6, 6, 6)	9.5 (9, 10)
鳥かごとお菓子	6.0 (6)	8.0 (6, 9, 9)

の低い子に多い。それに対して、年長の子は動機を善悪の判断とする「動機重視」の傾向にある。

平均的にみると、年長の子どもが動機重視になるが、年長に達しないと動機重視の判断をしないというわけではない。6才でも、動機重視の子どももいる。しかし、逆に、年長の子で結

果重視の判断をする子はいない。8才以上の子は、すべて動機を重視している。

## 2-2. ウソの定義についての質問結果

表2は、ウソの定義についての質問(実験③)の結果をまとめたものである。

表2 ウソの定義についての質問結果

第1型	ウソ=悪い言葉	6.3 (6, 6, 6, 7)
第2型	ウソ=まちがった言葉	6.4 (6, 6, 6, 7, 7)
第3型	ウソ=意図的なまちがい	7.8 (6, 6, 7, 7, 8, 8, 10, 10)

子どもにウソとはどんなことを言うのかと質問した答えは、大きく3種類に分けて整理できる。

第1型は、ウソとは、人前で言うてはいけないタブーのような「悪い言葉」のことだと理解するものである。ふつうの意味でのウソも入っているが、それがウソであるのは「悪い言葉」だからである。

第2型は、ウソとは、まちがった言葉を発したり、まちがったことを言うことだとするものである。たとえば、「 $2+2=5$ というのはウソになる」というものである。もちろん、本来のウソもウソと認識していることはいうまでもない。 $2+2=5$ というのは、単なるまちがいの可能性もある。ここで、子どもが単なるまちがいと意図的な虚偽を区別していないかという、そうでもない。ただ、その区別はあいまいである。

「まちがえはウソか」という問いに対して、「その子はまちがえた、そしてウソをついた」とか、「まちがえとウソは同じで、両方とも悪い」とか答える。まちがえとウソは混同されているともいえる。ともかく、ここではウソの定義に、単なるまちがえとウソの区別をはっきりと盛り込んではいない。

第3型は、ウソとは、相手を騙そうとして意図的にまちがったことを言うこととして理解される。ウソの本来の意味が理解されている。

以上の3つの型は、年齢的に見て、この順序に発展するようである。子どもの平均値を見てみると、第1型が6.3才、第2型が6.4才、第3型が7.8才となっている。平均値で見ると、第1型と第2型に大差は見られないので、発展の順序とまでは言えないかもしれない。

内容的にみると、ウソという概念が正しくつかまれていく道筋になっている。本来のウソだけでなく、タブーを含めた悪い言葉というウソについてのきわめて広い理解から、意図的にまちがえたことを言って相手を騙すことという、ウソの本来の意味を理解するという筋になっている。この意味では、発展の順序とあってよいだろう。

## 2-3. ウソの意図性を比較した結果

表3は、単なる錯誤と意図的に騙そうとした話とを比較したもの(実験④)の結果である。表中の数字は、より悪い方を答えたものである。表中で「信じやすいウソ」としたのは、相手を騙そうとする意図をもって話した真実らしく見えるウソである。「騙されにくいウソ」と

表3 ウソの意図性を比較した結果

	騙されにくいウソ	信じやすいウソ
牛のような犬の話と先生にほめられた話	6.9 (6, 6, 6, 7, 7, 7, 7, 7, 9)	8.9 (7, 8, 8, 8, 9, 9, 10, 10, 11)
自動車に乗せてもらった話と足が痛いと言った話	6.8 (6, 7, 7, 7, 7)	8.0 (7, 8, 8, 9)
上手な絵を描いたと言った話と使ったハサミを知らないと言った話	8.3 (8, 8, 9)	8.3 (8, 8, 9)

したのは、事実を誇張して正確に言わなかった話である。

大きな犬を見て怖くなりお母さんに牛ほど大きな犬を見たと言ったという話（6a）と、お母さんに先生から良い点もらったと言う話（6b）とでは、6aが「騙されにくいウソ」であり、6bが「信じやすいウソ」である。

街でカッコいい自動車を見ていてその車に乗せてもらったとお母さんに言う話（7a）と、お使いを頼まれて「足が痛い」と断った話（7b）とでは、7aが「騙されにくいウソ」であり、7bが「信じやすいウソ」である。

他の子が上手に描いた絵を「自分が描いた」とお母さんに言った話（8a）と、遊んでいてハサミをなくしてしまった男の子がお母さんにたずねられて「知らない」とウソを言った話（8b）とでは、8aが「騙されにくいウソ」であり、8bが「信じやすいウソ」である。

年少の子は、本当とは思えないような話、「騙されにくいウソ」の方が悪いと判断する傾向がある。年長の子は、逆に、お母さんが「信じや

すいウソ」、悪意をもってするウソの方を悪いと判断する。ただし、8aと8bでは、平均が同じになっている。しかし、これは、6, 7才の回答者がいないことを考えると、ピアジェが挙げた事例はケースとしての典型性だけを示すためのものであったと考えられ、ここから年齢に関する議論をするのは不適切にもみえる。

この箇所の議論でピアジェは、「（結果を重視する）客観的責任性の平均年齢は7才、（意図を重視する）主観的責任性の平均年齢は10才」（p.121: 209頁）と言っている。ここから考えると、ピアジェが挙げた騙す意図のある「信じやすいウソ」の事例は、低い年齢の子が多かったと考えられる。

#### 2-4. ウソにおける意図と結果の比較結果

表4は、重大な結果を重視するか、それとも騙そうとした意図を重視するかを比較した実験⑤の結果である。表中の数字は、より悪い方を答えたものである。

表4 ウソにおける意図と結果の比較結果

単なる誤りによる重大な結果	7.0 (6, 7, 8)
意図的に騙したが悪い結果を招かなかった	8.0 (7, 7, 8, 8, 10)

表4で「単なる誤りによる重大な結果」としたのは、街の通りの名前をよく知らないため少年がちがう道を教えてしまった結果、紳士が道に迷って目的地に到着できなかった話(9a)の方である。「意図的に騙したが悪い結果を招かなかった」としたのは、街の通りの名前をよく知っている少年が騙してちがった道を教えたが、紳士は正しい道を見つけ出して目的地に到着できたという話(9b)の方である。重大な結果を招いた話(9a)の方が悪いと回答したのが、平均年齢7.0才であり、結果は問題なかったが意図的に騙した方(9b)が悪いと回答したのが、平均年齢8.0才だった。

この箇所ではピアジェは、「物質的結果からウソや誤りを評価する子どもたちの平均年齢は7才であり、意図から評価する子どもたちの平均年齢は9才である」(p.125: 219頁)と述べている。これからみると、意図を評価する例として示した子どもの年齢が低い子どもに偏っていたことになる。

しかし、ともかく、結果重視は年少の子、意図を重視するのは年長の子という実験結果である。これは、失敗や盗みの場合と同じである。ウソの場合でも、年少の子は結果で善悪を判断

する。結果重視から意図重視へというのが、発達の順序である。

なお、この表には、中間型として含めてない例が1つある。7才半の子は、両方とも同じように悪いと答えた。ただし、どちらをより強く叱るか聞かれると、結果が悪かった方(道がわからなかった方)を叱ると答えている。

この中間型の子どもの答えはとても興味があると、ピアジェは次のように述べている。「彼は大人もときに行為の結果のみを考慮してしまうことを知っているけれど、そのときの大人は誤っており、物質的行為より意図の方が重要だと考えている」(p.126: 223頁)。

「大人が行為の結果のみを考慮する」というのは、実は、この子が「結果が悪かった方(道がわからなかった方)を叱る」と答えたのは、大人がそのように結果重視で叱ることの影響だとピアジェが考えるからである。

## 2-5. ウソが悪い理由についての質問結果

表5は、ウソがなぜ悪いのかその理由をたずねた質問(実験⑥)に対する答えである。ウソが悪い理由については、大きく3つにまとめている。

表5 ウソが悪い理由について

叱られるから悪い	6.8 (6, 7, 7, 7)
叱られなくてもウソ自体が悪い	8.8 (7, 9, 9, 10)
相手を騙すから悪い	9.3 (8, 9, 10, 10)

第1は、大人に叱られるから悪いとするものである。第2は、叱られなくてもウソそれ自体が悪いとするものである。第3は、相手を騙すからウソは悪いとするものである。表をみてわかるように、第1、第2、第3の順に、回答年齢が上がっていく。第3の理解がウソについての本質的な理解である。

## 2-6. 子どもにウソを言うのは悪いか

表6は、子どもに対してウソを言うことが悪いことなのかという質問(実験⑦)に対する回答である。



表6 子どもにウソを言うのは悪いか

子どもたちの間ではウソは許される	7.5 (6, 6, 7, 7, 8, 8, 9, 9)
子どもにウソを言うのは悪い	9.8 (7, 8, 9, 11, 12, 12)
大人に言うのも子ども言うのも両方悪い	9.0 (7, 8, 12)
子どもに言う方が悪い	10.7 (9, 11, 12)

「子どもたちの間ではウソは許される」という回答は、年齢の低い子に多い（平均7.5才）。年齢が高くなると、「子どもにウソを言うのは悪い」と回答する（平均9.8才）。

「子どもにウソを言うのは悪い」という回答は、細かくみるとさらに2つに分けることができる。「大人に言うのも子ども言うのも両方悪い」とする回答と、「子どもに言う方が悪い」とする回答に分かれる。前者の平均が9.0才、後者の平均が10.7才である。

### 3. 実験結果の解釈

#### 3-1. 客観的責任性

結果と動機を比較した失敗についての質問（実験①）および盗みについての質問（実験②）では、年少の子どもは、与えた損害結果の方を重視した（表1参照）。また、単なる誤りを教えたことによって目的地に到達できなかった話と故意にウソをついても目的地に到達した話を比較した場合（実験⑤）でも、年少の子どもは結果を重視した（表4参照）。このように結果重視に判断する傾向を、「客観的責任性」とピアジェはいう。これに対して、年長の子どもが示した結果より動機を重視する判断を「主観的責任性」とよぶ。

第1に、実験①、②、⑤から示唆されることは、年少の子どもが「客観的責任性」を示すことである。これをまとめてピアジェは、年少の子どもは「道徳実在論」にあるという。なぜなら、「客観的責任性」は「道徳実在論」がもつ性格の1つ（第3番目の性格）だからである。

また実験⑥の年少の子どもが示す「叱られるからウソが悪い」というのは、他律の道徳だと考えられる。他律の道徳は「道徳実在論」の第1番目の性格だから、実験⑥も、年少の子どもが「道徳実在論」にあることを示しているといえる。

これ以外の③、④、⑦の実験は、「道徳実在論」の性格を示してはいない。これらの実験は、「義務の他律性」、「規則の言葉の通りの順守」、「客観的責任性」のどれにも当てはまらない。これらの実験は、年長の子どもの性格を示すことに多くの意味があるといえよう。

#### 3-2. 客観的責任性から主観的責任性へ

実験①、②、⑤から示唆される第2は、「客観的責任性」から「主観的責任性」へという発達方向である。大人でも結果重視で善悪を判断することがあるから、発達方向というのは言い過ぎかもしれない。「客観的責任性」と「主観的責任性」は、それぞれ道徳判断の1つの型として位置づけるのが正しいだろう。

したがって、実験①、②、⑤の結果が示したことは、子どもが行為者の動機や意図を理解できるようになるのが、結果の理解より後になるということにすぎない。意図自体の理解までに時間がかかるということである。

これに関連して、ピアジェは、自分自身の意図を理解できるようになるのは、3、4才頃だと述べている（p.143: 250頁）。これと、先の実験結果は矛盾する。これについては、『子どもの道徳判断』第1章についての論文<sup>2</sup>で紹介した「思考と行動のずれ」によって説明が可能

である。これについて、次に述べる。

### 3-3. 中間型が示す意味—思考と行動のずれ

実験①には、表1に入れなかった結果重視と動機重視の中間型の例がある。

6才半の女の子の場合、比較した対のカップの話では、ジャムを取ろうとして1個のカップを割った子より、たまたま食堂のドアの向こうに置かれてあった15個のカップを割った子の方が悪いと結果重視の答え方をした。ところが、話題を彼女の経験に転じて弟が割ったコップとバケツの場合では、「わざとこわしたバケツ」の方が悪いと答えた。それに続いて、先のカップの話に帰って再び質問したところ、ジャムを食べたくて取ろうとしてカップを割った方が悪いと動機重視の答え方をした。

この事例は、自分の個人的体験を思い起こすことによって、判断が変化した。単なるお話についての判断では結果重視に判断したが、個人的体験を介することにより動機重視へと判断を変更した。

第2章の実験の方法的限定(1-8参照)で述べたように、ピアジェは、言葉で質問された単なるお話に関する判断と、実際生活の中での判断とを峻別する。この章の実験は基本的に、言葉で質問された単なるお話に関する判断についてしか調べていない。ところが、この女の子の事例では、彼女自身の個人的な経験では動機重視における判断していた。それを思い出せることによって、お話レベルの判断も動機重視に変わったわけである。ここに、ピアジェは、彼自身の主張、言葉で質問された単なるお話しに関する判断と実際生活の中での判断とは異なるものだという主張の正しさを確認する。

遊びの規則を調べた第1章において、ビー玉遊びの規則についての考え方と、ビー玉遊びで実際に適用する規則とは異なっていた。「思考はつねに行動より遅れてくる」(p.43; 69頁)という「ずれ(décalages)の法則」があるとピアジェは主張する。行動面の発達が先にあり、

その後に意識面の発達がある。規則実行の発達がまずあり、その後その実行状態がしばらく続いているのち、その実行状態について意識するようになる。だから、「思考」レベルの判断は前の時期にしていた行動の判断を示すことになる。

「思考と行動のずれ」という、この枠組みでみれば、「言葉で質問された単なるお話に関する判断」は、「思考」のなかにはいる。それに対して、個人的体験は「行動」のなかにはいる。中間型の女の子が体験のなかで動機重視に答え、お話についての判断で結果重視に答えたのは、「思考が行動より遅れる」ことを示すものでもある。そしてまた、結果重視から動機重視へ発達する<契機>としての個人的体験があることを示すものでもある。そういう意味で、この中間型は重要な意味をもっている。

### 3-4. ウソの真の性質の理解

残る実験③、④、⑥、⑦は、何を示すのだろうか。これらはすべてウソに関する質問である。

ウソの定義を調べた実験③からは、子どもがウソの本質(ウソとは相手を騙そうとすること)を理解するのは、年長になってからということがわかる。「8才以下の子どもでは、ウソの真の性質を理解することはできないのである」(p.113: 192頁)。

この点を説明して、ピアジェは次のように論じる。「子どもは他人のためよりも自分のために考える傾向があるので、人を騙すということの実際の重大さがわからないのである」(p.113: 192頁)。

「自分のために」(pour lui) 考えるとは、「自分の方を向いて」考えるということ、つまり「自分中心に」考えるということである。子どもは自己と他者の区別ができない。いいかえれば、子どもに明確な自己意識を想定することは無理であり、したがって明確に自己と他者を区別する他者意識というものもない。だから、他者との関係である「騙すということ」の重大さが理解できない。そのように、ピアジェはいう。

子どもが自分中心に考えるというのは、ピアジェのいう「自己中心性」の特徴である。ここでピアジェは、この著『子どもの道徳判断』以前の研究で明らかにした自己中心性を、子どもの心理的特徴として前提している。

しかし、そこへ行く前に、実験結果から直接に出てくることを述べていこう。

実験④が示したように、年少の子どもは、「悪意はなくとも信じられない話（＝冗談のようなウソ）」の方を悪いと考える。その理由は、年少の子どもはウソの意図性の重要性を理解しないからである。ウソの意図性を重大視するのは年長になってからである。これは、意図を理解するのが、遅れるということである。これも「思考と行動のずれ」で説明できるだろう。「（子どもは）自分自身に関するかぎり、かなり早く（3, 4才頃）から意図的な過ちと単純な過失とを区別するようになる」（p.143: 250頁）とピアジェは述べている。ここで実験したのはお話しレベル（思考レベル）だから、「自分自身に関する」レベル（行動レベル）より遅れる、というわけである。

実験⑥によれば、年少の子どもは「叱られるからウソは悪い」のであり、叱られなければ悪いとは考えない。年少の子はウソの真の性質を理解していないので、そうなるのも不思議ではない。年長になると、ウソが悪いのは「相手を騙すから」だと考えるようになる。これは「ウソの反社会的性格」（p.133: 235頁）を理解できるようになったということである。

また実験⑦によれば、年少の子は子ども同士でウソを言うことも許されると考えている。叱られるというのは、大人から叱られるのであり、子ども同士の間ではウソは許されるということである。年長になると、子ども同士の間でのウソも許されなくなる。いやむしろ、大人に対してウソを言うより、子ども同士の間でウソを言うことの方が悪いと答えるようになる。

これは、子ども同士の対等な関係、ピアジェいうところの「協同関係」ができてきたからで

ある。この関係を自覚して、このような反応を子どもはするようになるわけである。

以上、実験③、④、⑥、⑦の結果は相互に整合性があり、年長へと向かう変化は、ピアジェのいう「協同」のプロセスで説明可能である。

## 4. ピアジェの発達の論理

### —大人の強制と道徳実在論

#### 4-1. 大人の強制が道徳実在論を生む

一般に、子どもの人間関係は、親子関係と友人関係の視点からとらえられる。ピアジェの場合、「子どもに対する大人の強制」と「子ども同士の協同」とする。実験結果が示すのは、年少の子どもと年長の子どものちがひ、あるいは年少の子どもから年長の子どもへの変化である。これは、先ほど述べたように、「協同」関係によって説明される。

残るのは、「子どもに対する大人の強制」のプロセスである。これは、実験結果から出てくるものではない。ピアジェが念頭におく「大人の強制」とは、たとえば、一定の時間に寝ることや食事することである（p.139: 245頁）。もちろん、この他に、「物をこわしてはいけない」とか、「お父さんの机の上のものにさわってはいけない」などの大人による命令もある。これらは、子どもにとって、そうしなければならない理由がわからない強制である。このような事柄はごくふつうの日常生活のなかにいくらでもある。これを思い浮かべれば、「子どもに対する大人の強制」の事実があることはだれも否定しないだろう。

ピアジェは、「大人の強制」について、自分の子どもの事例を紹介していく（pp.139-143: 245-249頁）。

ピアジェの娘は食が細かったので、食事の規則もあった。4時にココアを1杯、正午に1碗の野菜、昼食前に食欲増進剤として塩酸数滴を水に溶かして飲むと決まっていた。彼女が2才10ヶ月のとき、具合が悪かったので、母親は

野菜の分量が多すぎると考え、食事を終えようとした。ところが、娘の方は、いつもの規則通りに食べることに固執した。しかし、もちろん、彼女がそれを食べることはできなかった。そのとき彼女は泣きだして、後悔の念を示した。

この事例では、食事の規則が子どもにとっての強制である。それを子どもは受け入れた。そして一旦受け入れると、子どもはその規則の言葉の通りに実行する。そしてそれができないと、子どもは「後悔の念を示した」。つまり、道徳的観点からすれば、悪いと感じたとピアジェはみる。この例は、「(この時期の)子どもが責任性についてどれほど強く客観的に評価するかを示している」(p.142: 248頁)、とピアジェはいう。ここでピアジェは、「大人の強制から客観的責任性が生じること」を示したのである。

また別の例では、2才半のとき、彼女は貝殻で遊んでいて、貝殻を投げたらすぐこわれてしまった。貝殻はもろいものなので、これは彼女の責任ではない。しかし、彼女は呆然としてしまった。彼女は何も悪くないと説得するのにピアジェは苦勞した。それほど、彼女は貝殻をこわしてしまった責任を感じたわけである。これは失敗における客観的責任性の例である。

この例では、大人の強制がどこにあるかは不明である。「物をこわしてはいけない」という大人の日常会話がこの例の「大人の強制」になっているとピアジェは考えているのだろうか。それは不明である。ピアジェはここでは「大人の強制」について何も明示していない。ただ、大人の強制を、そのような社会的強制と考えることは可能であり、それはピアジェの考えに反することではない。

以上すべて、ピアジェの娘の事例は「行動レベル」の道徳实在論である。質問法の実験で調べた「思考レベル」の道徳实在論ではない。その点が、実験①から⑦までが示した「思考レベル」の道徳实在論とは異なっている。

そしてピアジェは、「幼少期においては、不可避にある大人の強制が、なんならかの道徳実

在論を必然的に引きおこすものである」(p.143: 249頁)と総括している。

#### 4-2. 道徳实在論と自己中心性

道徳实在論とは何であったか。前稿で引用したことを再びここでふり返ってみよう。

「義務や価値が意識とは無関係にそれ自体として存在すると考えること」、そして、「義務や価値が義務として押しつけられると考えること」、子どものこの傾向を、ピアジェは「道徳实在論」と定義した (p.82: 132頁)。そして、「道徳实在論」は3つの性格をもつとした。第1に、「義務が他律」(p.83: 132頁)であること。第2に、「規則を言葉の通りに守ること」、「規則の精神を守るのではないこと」(p.83: 132頁)。そして第3に、「責任概念の客観性」(p.83: 133頁)である。

ピアジェが示した娘の事例は、この3つの性格を示している。それゆえ、それは幼少の子どもが道徳实在論にあることを示している。しかも、その道徳实在論は「行動レベル」の道徳实在論である。そして、前項4-1の最後に示したように、「大人の強制」が「道徳实在論」を生みだす。

だが、ピアジェは、自己中心性も道徳实在論を生みだすことにかかわっていると述べる。そしてこの場合の道徳实在論は、「思考レベル」の道徳实在論についてピアジェは述べているようにみえる。

「道徳实在論は(大人の)強制と自己中心性が出会うことから生ずる」(p.127: 224頁)。

「道徳实在論は2種の原因の結合に起因しているように思われる。1つは、子どもの自発的思考(子どもの<实在論>)に固有のもの、もう1つは、大人の強制に固有のものである」(p.146: 253頁)。

表現は微妙に異なる点がある。前者で「自己中心性」となっているところが、後者では「子どもの自発的思考(子どもの<实在論>)」となっている。だが、「子どもの自発的思考」と

いうのは「自己中心性」を念頭においているとみてよいと思う。「子どもの〈実在論〉」と言いかえている点からも、そうみなせるだろう。

これは、2章の冒頭で、道徳実在論の概念を導入するにあたり、次のように述べていることから正しいと思われる。

「一般に実在論は主観と客観の混同(したがって自己中心性)の結果であると同時に、大人による知的強制の結果でもある。それと同じように、道徳実在論もこの2種の要因の干渉した結果である。」(p.82: 131-132頁)

ただし、自己中心性については、『子どもの世界観』など『子どもの道徳判断』以前の研究を調べてみないと判断できない。したがって、ここでは、これまでと同様、この点については保留としておこう。

また、「行動レベル」の道徳実在論と「思考レベル」の道徳実在論のちがいを、その関係などについても、ここでは不明のままとしておく。

## 5. おわりに

実験結果の解釈およびピアジェの娘の事例について、それが道徳実在論を示すというピアジェの解釈に賛同する意を示したが、それは3つの性格（「義務の他律性」「規則の言葉の通りの順守」「客観的責任性」）をもってピアジェが道徳実在論を定義したからである。

私は、ピアジェが「知的実在論」と区別して、「道徳」実在論と概念化し、子どもの幼少期（3才以前である。）、自己中心性の時期において、「道徳」という概念を適用することに疑問を感じる。自己中心性とは「主観と客観の混同」である。厳密に言えば、「主観」や「客観」は成人のカテゴリーである。「知的なもの＝知能」と「価値的なもの＝道徳」を区別するのも、成人のカテゴリーである。これら成人のカテゴリーが、小さい子どもにあるはずがない。それはある発達段階以降において、はじめて個人の

なかに生じるものである。

したがって、カテゴリー発生の研究も考えられてよい。道徳性はいつから生まれるか。そのような問いが適正である。価値と事実の区別のない、主観と客観の区別もない時期は、道徳性発生以前である。そのような子どもに対して、「道徳」実在論といっても、ほとんど意味がない。道徳実在論の3つの性格としたものは、たんに「実在論」の性格とすればよいのであって、ことさら「道徳実在論」なる概念を導入するのは、成人にとってのみ意味のあるカテゴリーを、あまりにも射程距離遠く適用するものである。

子どもは言語実在論によって、言葉が実在すると考えるから、大人の命令の言葉も実在すると考えるわけである。そこで子どもは価値が実在するとは考えていない。そもそも事実から区別される価値というカテゴリーを、子どもはもっていないのだから。

幼少期については、たんに「実在論」があるといえよ、というのが私の考えである。そうすれば、つまらない「平行論」（知的実在論と道徳実在論の平行関係）などという説明の必要もなくなる。平行論は、どこまでいっても、知的実在論と道徳実在論の間の関係を問おうとしない枠組みだからである。

---

### 引用についての注記

(p.260: 477頁)は、仏語版260ページ、邦訳477ページを指す。

使用した仏語版は

Piaget, *Le jugement moral chez l'enfant*, 1992, P.U.F. 7<sup>e</sup>éd (1<sup>er</sup>éd, 1932) .

邦訳は

ピアジェ、大伴 茂（訳）『児童道徳判断の発達』同文書院、1957年。

---

注

- 1 『子どもの言語と思考』( *Le langage et la pensée chez l'enfant*, 1923. 大伴茂 (訳) 『臨床児童心理学 I—児童の自己中心性』, 東京同文書院, 1954年) の「序文」は, クラパレード (Claparède, E) が書いたものである。この引用は, 序文でクラパレードが引用したピアジェ自身の文である。ピアジェからの出典は, *Arch. de psychol.*, XVIII, p.276. となっている。
- 2 拙稿「ピアジェは道德性の発達段階をどのように考えたか?—『子どもの道德判断』を読む(2)—」, 『神奈川大学 心理・教育研究論集』第28号, 2009年3月。